

タウンシップに生きる人びと -- 流浪するマシプメ レレ住民のライフ・ヒストリー (特集 南アフリカ の経済・社会変容)

著者	黒須 仁美
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	206
ページ	28-29
発行年	2012-11
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00003831



タウンシップに生きる人びと

黒須仁美

●はじめに

南アフリカ共和国(南アフリカ)において従来タウンシップは、都市空間のなかでも縁辺に追いやられた地域として、都市の広大な下層地域の一隅に位置づけられてきた。都市空間は、流浪しながら生き抜いてきた住民たちの軌跡がよく見える場所でもある。

今回紹介するマシプメレレ(コーサ語で「一緒に成功しよう」という意味)・タウンシップは、ケープタウン市街地より南部郊外に位置する。マシプメレレは、ケープタウンのなかでも比較的新しく作られたタウンシップであり、住民の多くは東ケープ州出身のコーサ人の出稼ぎ移民である。一九五〇年の集団地域法で、ケープタウン南部郊外地域は白人居住区に指定されたため、南部郊外地域に住んでいたアフリカ人には居住権が

与えられなかった。アフリカ人には喜望峰国立公園近くにあるアフリカ人単身者用宿舎のみ与えられたが、彼らは家政婦や庭師として労働需要がある白人居住区周辺に掘立小屋を建てるようになり、不法居住者が爆発的に増加していった(当時人びとはこの地域をサイト・ファイブと呼んでいた)。一九九一年に合法居住区となり、人びとはマシプメレレ・タウンシップと呼ぶようになった。今ではマシプメレレは約二万六〇〇〇人の居住者の住処となっている。

本稿では、筆者が調査したマシプメレレで人びとがどのように生き、住民同士の人間関係を形成しているかを記述することでその場に生きている人びとの息づかいを伝えたい。

●流浪する人びと

筆者がMと出会ったのは、マシプメレレで調査を開始(二〇一〇年八月)してすぐだった。知人宅で知り合い、彼女の大声で笑う表情とアフリカン・ママを思わせる風貌に、私はすぐに包まれていた。Mは当時六三歳で東ケープ州のイーストロンドン生まれ。両親の出稼ぎのため幼い頃にケープタウンのリトリート地区、ニヤンガ・タウンシップに両親と引っ越し、一三歳で東ケープ州のクイーンズタウンへ戻る。二〇代になるとすぐに

出稼ぎのため大都市ヨハネスブルグ、東ケープ州のポートフレイド、イーストロンドンへと、数年単位で各都市・地域を渡り歩いてきた。一九八〇年代後半にケープタウンへ戻り、親族を頼りながらリトリート地区やミューゼンバーグ地区、ステーションバーグ地

区、レイクサイド地区に働きながら滞在してきた。一九九八年頃にサイモンズタウンで働くためにマシプメレレに来たが、当時は既に頼る存在がいなかったという。また彼女は結婚せず、二人の子供を女一人で育て上げた。しかし子供たちも職を持ち、別の都市へ出稼ぎに行くと、それぞれの地で離れ離れに暮らすようになった。Mは生涯マシプメレレに留まり、故郷である東ケープ州には決して帰らないという。彼女は「今」の生活が幸せであり、一人で住んでいることに對して、そのときは寂しさを微塵も感じさせなかった。

ある日私が訪ねると、Mは知人と抗う口調で話していた。事情を彼女の友人Aに尋ねると、Mは昨夜ワインを一本一人で飲み干してから機嫌が悪いという。友人Aの語りは、Mのもつ孤独の深淵を垣間みせるものだった。

友人A「実はね、彼女は昔アルコール中毒だったのよ。最近はずっと飲んでなかったけどね。昨日久しぶりに飲んだみたいで。(中略) やっぱり…寂しいと思うわ。彼女は娘たちと全然会ってないでしょう。もう(一九九四年ごろから。子供たちもこ

こに来ないし、Mも行かないから全く家族と会っていないわ。孫もいるらしいけど。」

タウンシップは流動的という特徴をもつために、住民の暮らしは親族と離別するという孤独を含んだものである。孤独と社会や人生に対しての不満が募り、その感情を癒すために酒が必要とされることも多い。

●マシブメレ住民の人間関係

調査を始めた当初、彼らの親族と名乗る人の多さに驚いたことを覚えている。しかし彼らと過ごすうちに、親族と名乗っていた人々は血縁関係者ばかりではないことがわかった。血縁関係を超越した彼らとの関係について、住民は「家族の一部」という表現を使う。

M「ずっと前から知っている人のことだよ。血縁関係はないけど、昔から、本当に昔から知っている人は家族の一部みたいなものよ。ケープタウンで私たちが会ってね、それから知っているのよ。(中略)私たちは何だっただけ分けるわ。家族みたいな存在ね。」

マシブメレでは、こうした親

族的呼称がある一定のネットワークまで使用していることが確認できる。ある一定のネットワークを「家族」や「親族」と呼称することで、農村共同体の代替的ネットワークを構築してきた。

南アフリカの出稼ぎ移民集団は、血縁関係や親族関係同士の相互扶助関係だけでなく、地縁関係や同郷意識に基づく人間関係を構築し、都市生活に順応していくといわれている(参考文献①)。しかしマシブメレにおいて、日常生活を営むうえで相互扶助関係を構築しているのは、より小規模で限定的な親族や親密な友人のみであった。

●故郷との切斷

故郷との縁が切れるということ、彼女たちの代々受け継がれてきた祖先との関係が途切れることを意味している。コーサの伝統文化のなかでも、クランとの関係は非常に強く、最も尊重される縁である。しかし、彼らは流浪する存在となったことで、過去の連続された関係を断ち切っていく。

M「都会では他人のことなんて気にしないからね。自分の周りだけ考えるのよ。東ケープは逆で、みんなのこと気にするわね。」

お互いのことを気にして、助け合う、それが普通だったのよ。都会は全然違うわね。でももう東ケープ州には帰らないわ、あそこには、もう何も無いもの。」

また、Mと彼女の子供たちは長い間連絡も取っておらず、もう会うこともない。
M「娘たちは、子供じゃないもの、大人になったもの、彼女たちの生活があるでしょう。寂しくないわ、私には友達がいるし、ここ(マシブメレ)が好きだから。友達は全然多くないけどね。彼女(友人A)のおかげでここにも住んでいるし。彼女がいて良かったわ。」

南アフリカの劇的な歴史の中で、都市への出稼ぎ労働は、アフリカ人の生活環境や人間関係に大きな影響を与えた。多くの男たちが生活のために仕方なしに農村を出て賃金労働を強いられ、そして次第に女性たちまでもが故郷を離れ未知なる都市へと駆り出される。

都市という新たな渦にもまれて生活するなかで、彼らは都市を流浪する選択肢を取り続ける。そして新たな土地に辿り着く度に、能動的に互助と扶助を構築する能力をもっていなければならなかつ

た。それは、決して多くの人間を巻き込んで共生するという理想の共同体を形成するのではなく、一部の親族や友人を取り入れた限定的な人間関係であった。その関係は、その土地限りであるが故に孤独を含み、彼らが移動していく度に一端切斷される。しかし新しい土地で、親族や親密な友人による限定的な人間関係が再生されていくのである。

●おわりに

彼らの生活基盤である都市は、今後も拡張し続け、一層彼らの人間関係は変容していくことになる。しかし、タウンシップの住民たちは悲惨な境遇にただ屈服しているわけではない。彼らは孤独や切斷をも含んだ人間関係を再構築する能力を備え、生き抜いている人びとなのである。

(くろす ひとみ/大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程修了)
《参考文献》

①Ngxabi, N. E. 2003. *Homes or Houses? Strategies of homemaking among some amaXhosa in the Western Cape*. Unpublished Master's dissertation, Cape Town: University of Cape Town.